翻　訳

シリル・スミス『最良の時代を迎えたマルクス』（ロンドン，プルート出版，1996年）「序文」「第3章　社会化された人間性の観点」（続）

西　野　勉

目　次

Ⅰ　訳者前書き
Ⅱ　著者序文
Ⅲ　第3章　社会化された人間性の観点
(1)　カール・マルクスと人間性
(2)　非人間的な形態における人間性
(a)　疎遠な世界
(b)　我々自身からの疎外
(c)　マルクスと経済学
以上前号〔第67号〕
以下本号〔第68号〕
(d)　富と価値
(e)　『経済学批判要綱』においてマルクスは次のように富を説明する。
(f)　歴史とは何か？
(g)　階級闘争
(h)　国家 ── その原因と救済
(3)　疎外の止揚
(a)　人間的に生きるということ
(b)　革命とは何か？
(4)　結　　語

(d)　富と価値

マルクスの経済学に関する仕事は，二つの反対形態つまり「資本の下に包摂された」

疎外された生命活動と「自由な協働」において人間的に遂行される生産との，この二つの反対形態の対比に集中した。この対比は「同じ」素材と装置で，「同じ」対象物が造られるかどうかに関することではなかった。

これが，**価値**つまり生産の非人間的形態にのみ属する「純粋に社会的な現実性」と**富**（wealth）との背反を彼が強調した理由である。本来的に「富」は，全体として，「全般的富裕」にあるものとしての人間の幸福を意味していた。ブルジョア的所有の転倒した非人間的形態の内部を見れば，それは貨幣額という量的なタームで表現されているのである。それは，資本の形態すなわちその所有者がそれを生産する人間をそれによって搾取する資本の形態をとる。

『資本論』第１章に，その二つのそれぞれについての叙述，富に関する叙述，価値に関する叙述が数ページにわたってなされている。

「労働は…物質的富，それが生産する使用価値の源泉であるだけでない。ウィリアム・ペティがいうように，労働は物質的富の父であり，大地はその母である。」[43]

「ある種の経済学者が，商品世界に付着する物神崇拝によって，あるいは労働の社会的規定性の外観によって如何に惑わされるかは，交換価値の形成において自然が果たす役割についてのその訳の分からない退屈な議論によってよく示されている。交換価値は物に付与された労働の一定の社会的表現であるのだから，それは，自然的内実を何ら持ち得ないのは，為替相場がそうなのと同じである。」[44]

(e) 『経済学批判要綱』においてマルクスは次のように富を説明する

「しかしながら，実際上，狭いブルジョア的形態が剥がされるならば，富とは，普遍的な交換においてうみだされる諸個人の欲求，素質，享受，生産的諸力等々以外の何であろうか？富は，自然的諸力に対する，即ち，いわゆる自然が持つ諸力，ならびに，人間自身の自然が持つ諸力に対する人間の支配の十全な発展でなくて何であろうか？富とは，先行の歴史的発展以外にはなにも前提することのない人間の創造的諸力の絶対的表出以外の何であろうか？そして，この歴史的発展は，発展のこの総体性，即ち，既存の

---

[43] 同上：143.

[44] 同上：176.

尺度では測れないようなあらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を，自己目的にしているのではないのか？そこでは人間は，自分を何らかの特殊な役柄において再生産するのではなく，自分の総体性を生産するのではないのか？そこでは人間は，何か既成の物に留まろうとするのではなくて，生成の絶対的な運動途上にあるのではないのか？」[45]

この草稿の後の方で，マルクスは，近代技術の発展が「真の富」としての人間の富の生産，したがって真の人間的生活，「自由な発展した諸個人」[46] の生産を可能にする道筋を論じている。これは，富がブルジョア社会において採る非人間的な形態に対しては全く対立するものである。

人間性が非人間性の内側に封じ込められてしまっている時，これはその囚われ人にどんな結果をもたらすか？

「ブルジョア経済において――そしてそれが対面している生産段階――においては，人間のこの内的潜在能力の完全な表出は，彼の総体的空疎化に転化する。彼の普遍的な対象化は彼の総体的疎外となり，活動の 一面的な目的の廃棄は，自己目的を完全な外的目的への生け贄にすることになる。」[47]

アダム・スミス――ディヴィッド・リカードも彼に同意している――は，資本のために剰余価値を生産する労働を正確に「生産的」労働と呼んだ。彼等は，「収入」から支払われる人々を不生産的労働者と呼んだのである。スミスは，その問題に関して必ずしも首尾一貫できたわけではなかったが，しかし，マルクスは彼を批判した二流の経済学者を批判した。 スミスの長所は，特殊な歴史的生産形態を分析するための彼の確固とした試みだとマルクスは考えたのである。

マルクスは「非生産的労働」というカテゴリーについて，売春婦と法王というなかなかやっかいな二つの例を示唆した。[48] そして， スミスについての俗流批判の議論を使って，マルクスが犯罪者も生産的労働者であるということを「証明」して見せているすば

[45] 『経済学批判要綱』，28：411-12.
[46] 同上，29：91.
[47] 同上.
[48] 『剰余価値学説史』，Ⅰ：186。また31：83.

らしい数ページの箇所がある。「犯罪者は犯罪のみでなく，刑法を生産し，それと共に刑法の講義をする教授を生産する…。」[49] 彼は，さらにリストに次のものを加える。：警察官，裁判官，拷問道具，銀行券の技能，鍵の製造，教授の書物，等々。

しかしながら，スミスの際だっていたところは，次の解説に示されている。

「例えば，5ポンドで『失楽園』を書いたミルトンは，不生産的労働者であった。他方，出版社のために材料を生み出した書き手は生産的労働者である。ミルトンは，絹の温かさのために絹を生産するのと同じ理由で彼の「失楽園」を生産した。 後になって，彼はその生産物を5ポンドで売ったのである。しかし，出版社の指示の下に書物を装丁するライプチッヒの文字通りのプロレタリアートは，生産的労働者である。なぜなら，彼の生産物は，始めから資本の下に包摂され，資本の増大の目的のためにのみ存在することになるのだから。」[50]

「マルクス主義者」は，純粋に量的な面での資本による賃労働の搾取を描くことに気を奪われていたために，それが基本的な病の一症状にすぎないことを忘れていた。賃金労働者の生活は，彼女にどれだけが支払われようと段々と「貧困化」するのだった。

生活とは，週何ポンドという次元のみで評価されるものではない。それは勿論ものの一面ではあるが，それは何が真に人間的であるかの規準によって評価されるものなのである。

「資本家的蓄積の一般法則」はこの社会形成の性格を次のように表現している。

「対象的富が労働者の発達欲求を充足するためにあるような逆の事態とは反対に，労働者が現存価値の維持増殖欲求を充足するために存在する一生産様式。宗教においては，人が彼自身の頭脳の産物によって支配されるのと丁度同じように，資本家的生産においては，彼は彼自身の手の生産物によって支配されるのである。」[51]

労働者と彼がその労働生活で使う技術との関係を考えて見よ。労働者が機械を使うの

---

[49] 同上：387-8。また30：306-10.
[50] 同上：401。また34：448.
[51] 『資本論』第1部：772.

ではなく機械が労働者を使っている。しかし，機械は人間力の表現なのであり，それが非人間的な資本形態に包まれているのである。

マルクスが『資本論』においてその過程を分析しているように，彼は，人間生活を益々非人間的に支配し，益々意識的コントロールから遠ざかる方向に押しやっている社会的諸形態を描写している。当然に経済学者達がそれらについて考えるやり方は益々幻想的になる。資本の形態すべてがこの転倒した性格を持つのであって，それは交換価値の持つ基本的な転倒に起因しているものなのである。しかし，この不条理は，資本のより発展した形態においては新しい高みに達するのである。例えば地代をとって見よ。諸君は誰によっても生産され得ない土地を商品とか貨幣とかによってどのようにして評価するのか。

「剰余価値の一部分であるところの貨幣地代の…土地に対する割合は，そのままでは不条理で非合理的である。；なぜならば，それは，互いに相反する尺度によって量られる通約できない量，つまり一方での独自の使用価値，幾ばくかの平方フィートの一片の土地と，他方での価値，独自の剰余価値。」[52]

「より高い社会経済形成の観点からすれば，大地に対する特定の人々の私的所有というは，丁度他の人々に対する一人の人間の私的所有と同じく不条理なことである。」[53]

第三部の終わり近くで，マルクスは，世界を見る経済学者の妙なあり方について述べている。

「社会的な性格とただの事物としての性格を同時に合わせ持つムッシュー・資本とマダム・土地にはお馴染みの，魔法にかけられ，転倒され，逆立ちさせられた世界…。その最良の代表者[古典派経済学]でさえ，多かれ少なかれ彼等の批判が解き明かしてきた幻影の世界の中に取り込まれたままである。」[54]

---

[52] 『資本論』第3部：913.
[53] 同上，911.
[54] 同上，969.

より発展した信用の諸形態においては，貨幣が魔法によってより多くの貨幣を生み出すように見える金融的編成が現れてくる。それは，生産とは何の関係もなしにこの「奇妙な特性」を持つように見える。「木が成長するように，貨幣を生み出すことが，この貨幣資本の形態においては資本の特性のように見える。」[55] そして国債の売買について語る時，マルクスは次のように言う。:「利子生み資本はいつもあらゆる奇妙な形態の母であるから，例えば債務は，銀行家の精神においては商品として現象する。」[56]

経済学批判を通じてマルクスによって分析された近代社会の諸特徴のそれぞれは，創造と自己創造の潜在力と，それがその内部に囚われて一つの社会的力として資本の実体となっているところの，この潜在力の非人間的否定との間の矛盾を表出しているのである。この力のもとでは，諸個人は単に「経済的諸範疇の人格化，独自の階級的諸関係と利害の［担い手］」[57] としてのみ見なされ，また自分自身をそう見なすことになる。

労働者と資本との間の衝突は，これを目に見え手に触れるものにする。階級としての労働者は，彼等が彼等の人間の能力，労働力を賃金と引き替えに売ることによって，全体としての社会の知識を代表する生産手段に連関する。こうして彼等は，人間性の真の特質 —— 自然の一部としての自覚的な自己創造者であることから閉め出されれるのである。組織された統一体を求める労働者階級の闘争は，生活のこれらの非人間的諸条件の止揚の可能性と必然性を示している。彼等の生命活動が富を創造するための自然との人間的交流過程である人々が，単なる「労働力の人格化」に結果するそのあり方に逆らって闘っているのである。この運動は——それへの参加が意識されているかいないかにかかわりなく——，生命活動へのしかかるの資本の直接的な力への挑戦なのである。それは人間生活が非人間的に扱われているあり方全体，近代社会の多くの非人間的諸形態，を問題の俎上に乗せる。

今日の社会では，生産的労働は，資本の支配のもとでの生産以外では何の意味も持たない。生産諸力は，資本の生産力の形態をとることが出来るのみであり，生産の社会的諸関係は，非人格的な，抽象的な資本の関係であり得るのみである。マルクスの「経済学批判」の目的は，あらゆる経済学派に共通するところの憶説，つまりその中で生活す

---

[55] 同上，517.
[56] 同上，596.
[57]『資本論』第1部：92.

る人々の生活に対して，それとは違った，それとは反対のこのような社会形態である以外には社会はあり得ないと考える憶説を，人の目に晒して，それに挑戦することにあったのである。

(f) 歴史とは何か？

我々の生活が疎外されているために，歴史の過程が人間生活に対する外的な力によって動かされるようにみえる。それは，我々自身が行う行為ではなく，我々に降りかかってくるもののように見えるのである。マルクスは歴史は人々のの活動であるが，彼等が望む結果を何時ももたらすものではなかったことを強調している。

「人は彼等自身の歴史を造るが，しかし彼等が望む通りには造らない；彼等はそれを彼等自身が選んだ諸条件の下で造るのではなく，過去から与えられ，引き継がれたところの直面する諸条件の下でそれを造るのである。死んだ世代の伝統が暮らしの頭脳の中に悪夢のようにのしかかっているのである。」[58]

勿論，我々は歴史から免れることは出来ない。それは何時も我々の生活に条件を与える。しかしながら，ある日「悪夢のよう」ではなくなるであろう。

「マルクス主義」はこの歴史過程の説明を，あたかもマルクスが人間生活の永遠の本質的な性格を描いていたものであるかのように読んだ。この作品の全ポイントは全く正反対のことであった。彼は我々の生活が，外的な諸力と見えるものによって動かされている非人間的条件について語っていたのである。そこでは，「歴史」が活動の主体のように見え，我々は「歴史的諸力」によって引き回されている操り人形であるかのように現象する。人間的に生活するということは，我々の間の社会的諸関係が我々の集団的決定に委ねられることを意味する。これが我々の「真の意識的歴史」の始まりであろう。

生活の疎外された形態においては，人間の創造的諸力は疎外された社会的諸関係の枠内で作動し，絶えずそれと衝突する。諸個人の自己活動は，

「彼等自身にとって，諸個人から全く独立・分離した，諸個人の外側に横たわる世界

---

[58]「ナポレオンのブリューメル18日」，11：103.

として現れる。それは，諸個人，その諸力が自己活動であるその諸個人が，互いに分裂し，対立状態になっているからなのである。」[59]

人間が互いに分裂し，対立しあっているということは，彼等が自分達自身に対して対立しているということである。人間であることは，生産的な活動と統一した全体を形成する社会的連結を必然的に伴う。現在，彼等は互いに衝突している。この衝突の一結果は，社会の全体性の分裂，諸個人の人格性の分裂である。

「マルクス主義」は「基礎と上部構造」についてのマルクスの比喩から一つの機構的な「モデル」を造り出した。マルクスが，そのことに関する彼の思想についての最も有名な叙述，沢山リプリントされている「経済学批判」の「序文」，の中で実際に言っていることは，次のことである。

「これら生産諸関係の全体が社会の経済的構造を形成する。それが現実の土台であり，その上に法的・政治的上部構造が生じ，それに対して特定の社会的意識形態が照応する。物質的生活の生産の様式が，社会的，政治的，精神的生活過程一般を条件づける。」[60]

粗野な形態の「マルクス主義」は，これを意識における変化は生産諸関係の活動によって引き起こされるという叙述として読みとろうとしてきた。（ある説明は，生産諸力，最悪の場合はこれが**技術**を意味するというのである。）この極度に集約された章句においてマルクスが語っていることは必ずしも明白ではないとはいえ，こうした解釈は正しいものではあり得ない。私は，我々の社会関係が我々にとって理解されていないで，我々に敵対的である時，我々は我々の生活を統御していないということを，彼が言おうとしているのだと思う。我々の観念は，我々が創り出しているのではない「我々の意志から独立した」形態の中で生じているのである

疎外された諸関係の内部で生活が営まれて行く時，諸関係すべては隠蔽される。社会的な連結はそれ自身固有の生命を持つかのように現象する。生産の諸力におけるあらゆる変化，つまり，パン焼き機やコンバイン収穫機の効率性の変化が予測しがたい仕方でこの連結のネットワークを狂わせるだろう。新しい基礎上で，政治的，思想的，情感的

---

[59] 『ドイツ・イデオロギー』，5：82.

[60] 『経済学批判』序文，29：263.

生活が影響を受けるであろう。このどれもが，誰の意識的決定の結果ではないのである。

生産諸力と社会的諸関係との分離敵対は，それぞれの歪曲を必然的に伴う。マルクスはこれらの対立するカテゴリーの有機的連結を示している。彼はよく，資本という社会的関係をそれ自体が生産力であるものとして語る。[61] 生産する諸能力は，集団的な人間の欲求を充足するために意識的に管理されていない。敵対的な諸個人の間の非人間的諸関係がこれらの諸能力の発展を押しとどめ，歪めているのである。

人間の生産能力と人間の自己創造は，非人間的社会形態の内部で成長する。それと共に人間的に生活する可能性――しかし，あくまで可能性が成長する。なぜなら，非人間的外皮が人間的内実に対して障害として作用するからである。その敵対性が最も鋭くなる近代において，このことが認識され，この認識が意識的活動の基礎になることが可能となるのである。

「マルクス主義者」の公式：生産力＝機械＋労働力，これは恐ろしく「唯物主義者」のように見え，実際には疎外と結びついた外観の例証をなすものである。それはマルクスが挑戦するところのもの，つまり労働と労働の諸手段との分離という事態をまさに当然のこととして認めているのである。「マルクス主義」のこの堕落した解釈は，その中では，技術が人間の意識の背後で作用するところの，ある種の神秘的な仕方ですべての人を追い立てる「経済決定主義」にしがみついているものなのである。

「物質的な社会関係」と意識との間の関係に関する「マルクス主義者」の議論は，彼等がその分離を受け入れていることを意味していた。人間の活動は意識から独立に考察されうるのであり，その形態は人間性とは何かを無視することによって考察されうるというのである。マルクスが「彼等の存在を決定するのは彼等の意識ではなく，彼等の意識を決定するのが彼等の存在なのだ」[62] という時，「マルクス主義者達」は，そこから人間の考える行為は外的な「社会的諸条件」によって不可避的に形作られるものであるということを聞き取るのである。しかし，マルクスは，疎外された社会生活がそこに生活する人びとにとってどう現象するかということに照準をを向けていたのであった。マルクスによれば，彼等の解放は，彼等の社会的存在に対する意識性の力を拡大することを

---

[61] 例えば，『経済学批判要綱』，28：419。Derdk Sayar's Book, The Viorence of Abstraction (Oxford: Blackwell, 1987) がこの点で役立つ。

[62] 29：263.

意味するのである。

何が起こっているのかが洞察しやすくなる例外的な時期がある。たとえそれが部分的な洞察であってもである。これは，生産の人間的な諸力と現存の諸関係との不適合が頂点に達するときである。その時，ある人々は自らの苦悩の意味，他人の苦悩の意味を部分的に認識することが出来るようになり，この苦悩が彼等の人間的諸力の発達を阻害していることの表現だということを部分的に認識することができるようになるのである。違った生活の仕方が創造されるかも知れない機会が，その疎外された形態を通して顔をのぞかせるのである。:「その時社会革命の時期が始まる。経済的基盤の変化と共に巨大な全上部構造が多かれ少なかれ急速に転形される。」[63]

マルクスは，そのような変化が機械的に生じるかのように考えることは全くしなかった。歴史の指図にただ従うだけの男女ではなく，彼はそのような変化の時期に諸個人が何を考え，何をするか，何時苦悩が彼等になぜという問いを尋ねさせることになるか，に関心を集中した。その時に，彼等の或るものは，彼等の窮状が彼等の人間的潜在力とその現存の社会的編成との衝突から生じていることを理解するに至るかも知れない。その時に，彼等は彼等の社会諸的関係を再構成する道を見つけるために闘うかも知れない。

マルクスは，「生産の経済的諸条件の物質的な変化」は「自然科学的精確さで決定される」かも知れないが，これは決して法，政治，宗教，芸術，哲学等の「観念的諸形態」については当てはまらないということを特に強く指摘した。これらは，人がその中で「この衝突を意識し，それと闘う〔形態であり〕，…この意識こそむしろ物質的な生活の矛盾から説明されなければならないのである」[64] と。

『経済学批判要綱』にはプロレタリアートの意識を奴隷の意識と比較している一文があるが，私はこの一文を，確固とした「マルクス主義者」さえもが立ち止まって考えるべきだと思う。

「生産物が自身の生産物だという自覚，そしてその実現の諸条件からの分離が不当な

---

[63] 同上

[64] 同上

強制なのだという認識，これは大変な意識であり，それは資本に基礎をおいた生産様式がそれ自体生み出すものなのであるが，それは丁度，奴隷が自分は**他人の所有物**ではありえない，一人の人格なのだと意識することが，奴隷制を一つの人為的にその存在が長びかされたものにすぎないものにし，それが生産の基礎であり続けることを不可能にするのと同じことである。」[65]

さて再びマルクスが「上部構造」と言う規定の下に含めたところのものを見てみよう。：法，国家，宗教そして哲学――疎外を特徴づけているこれらはすべての諸制度や観念形態。それらのそれぞれは，歴史過程において役割を演じているのだが，しかし，それは諸個人と社会との敵対を表現する形態としてである。それぞれは人間の共同的な或るものの非人間的・非社会的な形態，人間性を否定した人間生活の形態なのである。我々の生活は「抽象的なもの－貨幣，民族，国家等－によって支配されている」が，この「抽象的なもの，あるい観念」は，諸個人を支配する物質的諸関係の理論的表現にすぎないというのが，マルクスの強調するところなのである。[66]

『経済学批判要綱』において，マルクスは，克服されるべき歴史的必然性についての彼の理解を示している。賃労働と資本の搾取関係にまつわる歪曲と転倒について語る際に，マルクスはこう強調する。

「この転倒の過程はひとつの歴史的必然ではあるが，それはたんなる一定の歴史的出発点・基礎からの生産諸力の発展にとっての必然性にすぎない。それは決して生産の絶対的必然性ではない；むしろ，それは過渡的なものであり，この過程の結果や内在的目的は，この基礎そのものつまり転倒過程のこの形態を止揚することなのである。」[67]

自然の諸法則；人はこれを可能な場合は利用するが，しかしそれを変えることは出来ない。歴史の諸法則；その目的はそれらが克服されることにある。マルクスの歴史観は非人間性の殻の中に閉じこめられた人間性の歴史，そこからの脱出の闘いを問題にして

---

[65] 『経済学批判要綱』，28：390-1.

[66] 同上，28：101.

[67] 同上，29：210.

いるものなのである。この文脈においてのみ，諸君は人間の生産諸力とその内部で生産諸力が発展するところの社会的諸関係との対立がなぜ存在するのかを問うことが出来るのである。その時においてのみ，その裂け目が**如何**に止揚されるのかを問うことが意味を持つのである。この分裂こそが，それら「物質的生活の諸矛盾」の基盤であり，意識形態が何故我々の生活のあり方から独立して現象するのかを理解する可能性を唯一与えることが出来るのがこの矛盾なのである。

疎外された生活の歴史的発展に関するマルクスの概念は，かくして人間**活動**の本質と人間の**創造的力**の成長にその中心を置くことになるのである。人間の諸関係が集団的に意識的に決定される社会において，すなわち人間の諸関係が人間性の本質的諸特徴に照応した社会において，マルクスは，「生産諸力と生産諸関係」が「社会的個人の発展の二つの側面」になるだろうという予見をするのである。[68]

マルクスが「上部構造」に属するものとして取り扱った諸要素を，私が91ページでとり挙げたとき（文中註65の直後の叙述を指す；訳者），私はそのリストから一つのものつまり芸術を除いた。宗教，哲学，法，政治とそれを並ばせるのは何か？芸術が他のものと共通するのは，生活からのその分離，つまり，その実践が「芸術家」と呼ばれる特別な人々の手中にあると言う事実であると私は思う。疎外の克服ということは，芸術的生産と他の生産諸分野全体との有機的一体化と結びついたものであろう。そこでは，想像力は，知性や理性をともなった感情と統一されるであろう。

今日でさえ，なお，美しいものやそれを生産する様式は，人間的事態(humanness)を覗き見る窓を我々に与え，自由な創造の可能性の実例を見せているかも知れない。ただ，その窓が，貨幣の汚物や抑圧，搾取，特権等によって汚く汚され，それを通じて我々が見ることの出来る視界が，我々にとって汚らわしく受け入れがたいものになっているということにすぎない。

マルクスは歴史を二つの運動として理解した。「人間的であること」つまり人間の創造性は，技術のあらゆる進歩と共に展開する。しかし，だんだん非人間化されゆく枠内でそれが進行するのである。これら二つ側面の衝突と有機的な内的依存，それが変化の源泉である。これは19世紀の場合よりも20世紀の場合の方においてよりはっきりとした

---

[68] 同上，29：91.

教訓となっている。21世紀において，この矛盾が解決される条件がついに成熟するであろうか？

(9) 階級闘争

マルクスとエンゲルスが「共産党宣言」を次の叙述で始めたことを，すべての人は知っている：「すべてのこれまで存在した社会の歴史は，階級闘争の歴史である」。しかしながら，マルクスの歴史観において階級のしめる場は「マルクス主義者」がしばしば考えてきたほど単純ではない。この章句でさえ完全なまま残されたのではなかった：エンゲルスは，後になってそれがあてはまる範囲から前史を除く脚注を加えた。さらに，「経済学批判の序文」は一言も階級について言及していないのである。

「階級」という言葉によってマルクスは，経済的役割とか所得階層による人々の分類の仕方としての社会学的なカテゴリーを仕上げようとしたのではなかった。或る「型」の社会とか歴史の一構成部分というのではなかったのであって，マルクスの考えの中には，そうした思考装置のしめる場はない。階級に関する古典的マルクス主義者の「生産手段に対して同じ関係を持つグループ」という定義は，マルクスがその批判の一部に取り上げたリカードウの作品の一こまなのである。

リカードウは，ブルジョア社会を彼等の異なった「収入」によって，三大階級に分割した：資本家は利潤を，労働者は賃金を，地主は地代を受け取る。[69] しかし，マルクスが知ろうとしたことは，社会的諸関係つまり資本が我々の生活を如何に形成するか，階級や亜階級への分割が人間性を如何に隠し，圧迫するか，なのである。

マルクスにとって階級とは，他の階級との衝突の中で行動し，自らを形成するものとしての歴史的存在なのである。近代社会での諸階級は，互いから切り離しては理解され得ない。それぞれは，疎外された全体としての「社会構成」の関連の中において把握されなければならないのである。疎外の超克は，諸階級と諸階級間の敵対の消滅を意味する。

「バラバラの諸個人は，彼等が他の階級に対して共通の闘いを遂行しなければならな

---

[69] D. Ricard, Principles of Political Economy and Taxation (Everyman Paperback Edition), Chapther 1, Section Ⅶ.

い限りにおいてのみ，階級を形成するのである；彼等個々人は，他の点では，互いに競争者として敵対的な状況にあるのである。他方，階級は，逆に，個々人に対しては一つの独立した存在をなすのであって，その結果，諸個人は彼等の生活の諸条件が予め決定されていることを見いだすのである。…・諸個人の階級へのこの包摂は，支配階級に対して主張すべき独自の階級的利害を持たなくなるような階級が発展するまで廃棄され得ない。」[70]

「生産のブルジョア的様式は，生産の社会的過程の最後の敵対的形態である。この場合，敵対というのは，個人的な敵対という意味ではなく，諸個人の社会的存在様式から生じる敵対なのである。」[71]

この「ブルジョア的生産様式」に関して特殊的なことは何か？何故マルクスは近代労働者階級が革命的階級だと考えたのか。何故ブルジョア社会が「人間の活動によって設定された最後の隷属の形態」[72] だと考えたのか？資本は，二つのやり方で「この敵対を解決するための物質的諸条件を生み出した。資本は労働の生産力を高めた。世界的スケールで，人間性は，生活と労働の非人間的諸条件から自らを解放する潜在力を獲得した。資本はこの潜在力を非人間的形態の中に押し込めているのである。

進行した事態のとおり，それはプロレタリアートを，つまり歴史上他に例を見ない一つの社会階級を生み出した。それは「自らを一つの階級に形成し」，自らを組織し，その活動の過程で自らを意識するようになり，自らを一つの政党に構成することが出来るようになった。プロレタリアートの生活の非人間的条件，彼女が人間の生命活動を売ることによってのみ生活出来るということ，このことは，彼女が資本の力を，地球的次元で打ち負かす集団的な闘争を通じてのみ，彼女の人間性を主張することが出来るということを意味している。

人間になるために闘うためには，賃金労働者は，個々人が抱える諸困難を遙かに越えた仕事に立ち向かうことを避けるわけにはゆかない：賃金労働者を結合すること，プロ

---

[70]『ドイツ・イデオロギー』，5：77.

[71] 29：264.

[72]『経済学批判要綱』，29：133.

レタリアートを含めてすべての階級を廃絶すること，あらゆる形態における疎外から人類を解放すること。自らの政府機関をうち立て，生産諸手段を資本の所有者の手から取り上げ，社会全体を生産者達の自由な協働社会（association）に導かなければならない。

「共産党宣言」において，マルクスとエンゲルスは労働者階級の歴史的形成を資本の力の勃興と結びついた客観的過程として跡付けた。労働者階級の資本からの独立を求める闘争は，見通しのない個人の闘いとして始まり，部分的，局地的な闘いに発展し，共産主義をもとめる国際的な闘いに至る。賃金労働者がこの仕事を意識するようになる時にのみ，その過去の歴史は意味を持つ。

非搾取階級の諸個人，諸分野の利害の主張から始まる運動は，階級全体の統一された闘争に，始めは国民的に，それから地球的に発展し，最後にはあらゆる階級の消滅を目指す闘いに転態して行く。したがって，この発展の到達点は，人間の生産力の発展と労働者階級の運動が自らについて意識的になるその程度の両方に不可分に結びついているのである。

「マルクス主義者」は，階級闘争と人間性との結合を見失ってきた。今日，労働運動の中にこの結合を見いだすことは難しい。しかし，あらゆる混乱や裏切りに関わらず，賃金労働者の統一した社会的勢力への組織化は，決して止むことをしない。マルクスは共産主義を，この運動が資本の諸関係によって生み出された疎外された意識形態から自らを解放する客観的な闘いと考えていた。彼の共産主義政治活動は，社会主義的考えを労働者階級の闘争の中に「外側から」持ち込むことを意味したものではなく，それに耳を傾ける人間に，彼等がすでに行っていることの人間的意味について語ることを意味していたのである。

(h)　国家――その原因と救済

「上部構造」の一要素は重要である。マルクスとエンゲルスが非搾取階級の抑圧の道具として国家を説明したことはよく知られている。1990年代において我々は，それら大きな非人格的・官僚的な構造物，近代民族国家とそのグローバルな産物である国際的代表機関の残忍性や腐敗について，思いを致すことをあまり必要とされていない。

しかし，国家の力は，時には暴力装置の直接的表現ではあるが，それには帰せられ得

ない。また，階級支配の道具として単純に理解することも出来ない。そういう理解だけでは，もっと深い諸問題を逸らすことになろう：何故，諸個人の大多数が，国家の力を執行する相対的に小さな少数者の権威にひれ伏すのか？何故，彼等は一般的に誰かが彼等を支配する必要性を疑問無しに受け入れるのか？例えば，警察官，兵士，裁判官，囚人の見張り人，刑執行者が法を執行すると言うだけでは，彼等が何故そうするか，彼等がそうすべきだということが一般的に受け入れられているのは何故か？を説明しない。

マルクスが計画したところの国家についての書物を書かなかったという事実によって，この問題に関する要を掴もうとする我々の試みは止められるものではない。彼がこの主題についてものした唯一の長文の作品は，1843年に書かれた未完の「ヘーゲル法哲学批判」であった。それは，彼が社会主義や経済学を研究し始める前，彼のプロレタリアートという概念が形を取り始める前のことだった。有名な「序説」のみが完成され，刊行されたのであった。

勿論，後の政治的な作品において，マルクスは国家とその形態について多くの叙述をしている，――しかし，それらは決して彼の仕事の主要部に十分統合されるこはなかった。彼の目的は，疎外された政治形態の分析において，疎外された経済諸関係を研究することであった。

彼の巨大な計画の始めの「経済」の部分でさえ完成されなかったのである。それが継続されていたなら，疑いもなく，政治諸形態が歴史的に発展したそのあり方や，政治諸形態とそれらがそこに現れる意識形態との関係も扱われたことであろう。おそらくそれは『資本論』第1章，第3節における価値形態の解明と第4節の物神崇拝の議論と対応したことであろう。

マルクスは，晩年多くの研究されるべき事柄がありながら，ただ社会の原初形態の研究に多くの時間を費やした。[73] 彼は，私的所有や貨幣，国家のような疎外の諸形態が，数え切れない何世紀もの間そういうもの無しに存立してきた社会形態から，如何にして発生してきたのかを理解しようと欲したのであった。

資本と同じく国家は，きわめて即物的な，きわめて乱暴な説明を見いだす。さらに言

---

[73] The Ethnological Notebook of Karl Marx (Studies Phear, Maine, Lubbock), transcribed and edited with an introduction by Lawrence Krader (Van Gorcum, the Netherlands, 1974).

えば，それらのそれぞれは**精神的な**存在物と呼ばれもするが，それは価値がそうであるように，資本にせよ国家にせよそれらがその意識的反射物と切り離し難いものだからである。この意味での国家と統治機構の独自の諸形態であるその外観との間を区別することは重要である。マルクスは次のことを論じている。この諸形態つまり諸国民が統治される異なったあり方，また，一方での統治の諸制度と他方での社会階級や階級の諸部分とのその関係。しかしながら，このどちらも基本問題の枠外のことなのである：基本問題とは，何故ある人々が他の人々の上に力を持つのか？何故国家は存在するのか？何故「市民の権力」と「市民社会」との間に裂け目があるのか？である。これらの諸問題は「土台」と「上部構造」との関係に関する一般的問題の中心をなすものであった。

マルクスの彼の政治的反対者との闘いは，この文脈においてのみ理解されうる。ブランキやその後継者達，プルードン，バクーニン，その前はマクス・シュティルナーに対するマルクスの長年の闘いは，基本的に，諸個人と国家との関係についての彼等の見方に対する反対に向けられていた。(私は次のセクション「疎外の止揚」で革命について語るとき，この人達についてもっと語ることになろう。)

マルクスは，他の諸制度の中で国家が，社会生活の疎外つまり現実に階級間の敵対よりもっと基本的なものであるところの，諸個人の利害と共同体の利害との敵対を如何に例証するものであるかを示した。

「国家は，公的生活と私的生活との間の矛盾，一般的利害と私的利害との矛盾に基づいている。」[74]

「[共同体] は，個人と共同体の現実の利害から独立した国家としての形態をとると同時に，幻想的な共同生活としての形態をとる。…他方，これらの独自の利害の実際上の紛争は，絶えず共同的・幻想的な利害に対して現実的に対立しつつ，その国家という幻想的『一般的』利害を通じての実際上の介入と支配を必要とすることになる。」[75]

そのように国家は，共同体の一形態ではあるが，真の人間的な共同体と対照的に幻想

---

[74] 3：198.

[75] 5：46-7.

的形態の共同体なのである：「真の共同体においては，諸個人は彼等の協働社会の中で，それを通じて彼等の自由を獲得する。」[76]

マルクスはこの「幻想的共同体」に関わる幻想の基礎を，つまるところ，その幻想が如何にして払拭され，**真の共同体**が解き放たれるのかを，発見しようとしたのだった。疎外された社会の内部から見ると，国家は全能の神の声で語るように見える。宇宙創造の神のようなものは，実際のところは人間自体の活動の産物だということを全くよく知っている我々にとってさえそう見える。これに対する個人の意志の次元での説明は，「人々は欲するが故にこのように振る舞う」というのと同じように無益な宣言である。国家装置の機能を支配する人の善意や悪意が国家の謎を解き明かすのでもない。国家の神秘やその力は，「彼等は，従わなければ殺される」というような，「権力」次元で語られることによって説明のつくものでもない。

ブルジョア国家，その経済的基礎からの分離，そのことはマルクスによって，社会の基盤における個人生活の原子化から必然的に生じるものとして示された。疎外と物神崇拝性は，諸個人の生活が，彼等自身が造り出しながら，彼等の外側に横たわる諸力によって支配されるのだということを意味している。貨幣，資本と同様に政治形態も人々をバラバラにすることによって，同時に結び合わすのである。

「一方での政治の目的・善意と他方でのその諸手段・可能性との矛盾は，国家自体の廃棄なしに，国家によって廃止されることはあり得ない。」[77]

「このこと（部族等の共同体組織の解体－訳者）は，人が，孤立化した個人として自分自身に関係するに至り，そして孤立化した個人として自分自身を措定するその諸手段が，まさに彼に一般的な共同的性格を付与するものになるに至るような事態になった時に生じる…・ブルジョア社会において，例えば労働者は客体なしに純粋に主体的な存在になっている：しかし，彼に立ち向かっているものは，**真の共同体**となっているのであるって，それを彼は食い尽くそうとし，それが彼を食い尽くそうとするのである。」[78]

---

[76] 5：78.

[77] 3：198.

[78] 『経済学批判要綱』，28：420.

例えば，一つの新技術に直面した労働者を取り上げてみよう。法律は，それは彼に属するものではなく雇用主に属するものという。それは，その技術と労働者とが使い尽くされるまで労働者の孤立した生活を支配するだろう。しかし，これが巨大な技術発展の世界と労働者との現実的結合なのである。

マルクスは，この形態の必要性が生成するのを理解したのである。国家を形成するために結合することを自由に決定するpre-individualという啓蒙主義者の概念それ自体が，ブルジョア社会の原子化の一表現なのである。それは「市民社会における利己的個人」の幻影なのである。

しかしながら，彼つまり「利己的個人」の欲求は，彼をして他の人間を求めるよう追いやるのである。

「従って，市民社会の構成員を結合させるもの，それは，**自然的な必然性**つまり彼等が如何に疎外されているように見えようとも**本質的な人間属性**としての自然的必然性なのであり，同時に利害つまり市民生活を繋ぎ合わせているところの利害なのである。**市民の，政治的**生活でない生活，それが彼等の現実の紐帯なのである。従って，市民社会の**アトム**を結びつけているのは国家ではなく，彼等は，想像においてのみ，つまり彼等の幻想の**天国**においてのみ**アトム**なのであるというのが事実なのであって，…神聖な利己主義者ではなく，**利己的人間**なのである。**政治的迷信**のみが，未だに市民生活は国家によって結合されなければならないと考えているのであって，現実は，それとは逆に，国家が市民生活によって構成されているのである。」[79]

社会は国家によって定められた法律によってコントロールされているように見える。マルクスはそれがなにか自然であるかに見えるその幻想の根元を示すのである。彼が後に『経済学批判要綱』で示したように「社会は諸個人から成り立つのではなく，これら個人が互いに対面している諸関係と諸条件の総和なのである。」[80]

マルクスは「生活の物質的諸条件」の中に「法的諸関係や政治的諸形態」の源泉をもとめた。

---

[79] 4：120-1.

[80] 『経済学批判要綱』28：195.

「不払い労働が直接生産者から汲み出される特殊な経済的形態が，支配と従属の関係を決定するのであって，この関係は，生産それ自体から直接生成すると同時に逆に一つの規定因として生産にに反作用するのである。この基礎上に，生産の現実の諸関係から生じる経済共同体の全構成が，従ってその特殊な政治形態が築かれのである。生産諸条件の所有者の直接生産者に対する直接的関係――その関係のその都度の独自の形態は，何時でも労働のあり方の一定の発展水準したがってその社会的生産力に照応するのであるが――，そこに我々は，全社会の建造物の，従ってまた支配隷属関係の政治形態つまりその都度の特殊な国家形態の，最奥の秘密，隠された基礎を見いだすのである。」[81]

マルクスの商品，貨幣，資本の分析は，そうした社会的構成物が如何に諸個人の「背後で」動いているか，そして賃金労働者とその家族の生活を隷属させているかを示した。だから，ブルジョア国家は，それがどういう特殊な形態を採ろうと資本と資本家階級の政治的代理機関以外にはあり得なかった。資本が「主体」として活動し，国家は，疎外された搾取的経済諸関係の上に打ち立てられた上部構造に属するのである。

ここに『経済学批判要綱』に引き合いに出されている19世紀の教区牧師経済学者タウンゼントの『救貧法論』の一節を再引用しよう。

「貧民はある程度無思慮だということ，共同社会にはいつでも最も隷属的な，最も汚く，最も卑しい職というものがあるかも知れないということは，一つの自然法則のように思われる。人間の幸福の資産がそれによって大変増大し…，労働への法的拘束は必要以上の面倒と暴力や騒音を伴い，悪意を生み出す，などであるのに対し，飢餓は，穏やかな，物静かで，和らぐことのない圧迫であるだけでなく，勤労や労働に対しては最も自然な動機として，それはその最も力強い発揮を喚起するのである。」[82]

マルクスは，ここでいう「飢餓」を，「資本」と読むべきだということを知っていた。「資本の下では，労働者の協働は直接的な物理的力や義務，農奴的・奴隷的労働によって強制されないのであって，生産の諸条件が疎外された所有になっており，その諸条件

[81]『資本論』第3部：927.
[82]『経済学批判要綱』，29：221.

自身が客観的な協働ととして現存している状況によって強制されているのである。その協働は生産諸条件の蓄積と集中と同じことなのである」[83]

飢餓が作用する仕方，労働者にのしかかるその「物静かで，和らぐことのない圧迫」の作用の仕方は，資本家の手中への「生産諸条件の蓄積と集中」を通じてなのである。別の仕方―直接的な国家的暴力―は，高潔なクリスチャンの教区牧師タウンゼントの観察が正確に述べているように，遙かに「面倒の多いもの」であろう。

宗教，法，哲学とともに国家は，今や，非人間的形態の中での人間性の例証のように見える。政治的，法的，科学的諸形態は，共同体のための幻想的代役，人類の集団的経験として生じる。これら代理物は，経験がバラバラにされている限りにおいて必要なものなのである。我々が「真の」共同体から切り離されている間，それらは，外的な，強制された，超人間的な力として現れ，それらについての我々の意識は，我々に対するそれらの本当の関係を転倒させるのである。かくしてそれらは，それらが支配しているように見える世界の転倒性を鋭く表現するのである。

それらは上部構造であって，土台の問題ではない。それらは，人間生活の生産が社会化された人間性の「真の富」の生産形態でなく，特定の個人の私的所有の生産の形態をとる間，歴史に登場するのである。後者は我々の非人間化された生活の土台なのである。これらの形態に付随する虚偽の（false）概念は，我々の活動によって造られるのであって，それが我々自身の敵となる。

「マルクス主義者」と違ってマルクス自身は，ブルジョア国家に替わる「労働者国家」なる概念は持たなかった。[84] 共産主義への過渡の諸問題をまとめて論じる際には，このことについてもう少し言うべきことはあるだろうがここでは差し控える。疎外された生活の克服，マルクスが「共産主義」と呼んだもの，それは政治的力と生産的活動との間の対立の解消を意味する。共同的意思決定は，集団的な生産的生活の一部になるのである。

---

[83] 同上，28：510.

[84] 私が理解する限り，マルクスによる唯一のこの語句の使用は，バクーニンの批判に対する応答において見られる。：「彼は，そのような労働者の国家のなかで管理機能がどういう形態をとるべきか，自分自身に問うべきであった。」（24：520）

人間性をその非人間的殻から解き放つことは，社会の上に立つ政治的機関 —「幻想的共同体」— を「真の共同体」へ解消することを意味するのである。これは，労働者階級自身が他のすべての階級とともになくなる過程と同じ過程なのである。従って，官僚的国家機構による生産諸手段の所有が「社会主義」を構成するというような考えは，どんなものであろうとマルクスにとってはうんざりするものであったろう。

(3) 疎外の止揚

(a) 人間的に生きること

我々はしばしば，マルクスは明確な「共産主義社会の描写」を全然残さなかったとという主張を耳にする。ある人々はこれについて不平を言うが，他方では，我々は如何に生きるべきかという議論すべてをストップさせるための呪いとして「空想」という語を使うことによって，このことについてマルクスを賞賛する。[85] マルクスは，共産主義のために，そこでは我々は，財産，貨幣，国家といった疎外された形態を止揚するであろう世界のために，その全生涯を捧げたのだということがなにか「看過」されるようになる。

彼は，誰か専門家が諸関係の新しいワンセットを考え出すようなやり方でそれを考えようとしたのではなかった。そういうものは，ある種の賢い「社会工作者」によってもたらされねばならないような新社会なのであって，マルクスの思考とは無縁のものである。問題は，我々すべてがすでにそうなっているのにそれをを否定している殻を，如何にして我々が破ることが出来るか，なのであった。**集団的やり方**でその障害を取り払うことによって，我々は，すでに存在状態にある「人間的事態（humanness）」が発展・展開しうる生活のあり方に達することが出来るのである。それは人々に別の生活の仕方を強制することではなく，その目的は，人々に彼等が事実上存在する通りに生活することが出来るようにすることなのである。

マルクスの全仕事は，「協働の生産手段で労働し，彼等多数の労働力を自覚的に単一の社会の労働力として発揮するところの自由な人間の協働社会」[86] としての共産主義の概

---

[85] 幾つかの例について，次のものを見よ。Vincent Ggeogham, Utopianism and Marxism (London: Methuem, 1987)

[86] 『資本論』第1部：171，再訳.

念に，その基礎を置いているのである。

諸個人は自由に，集団的，意識的に彼等の社会的諸関係を構築するだろう。彼等の生産的活動は，彼等を相互にバラバラにしている社会的諸関係と衝突するかわりに，**相互のためである**ということがはっきり分かるものになるであろう。そのような未来の社会形態の形成がどのようにして前もって描き出せるであろうか？「次の火曜日から，諸君は，次のような諸原則に従って，自由であるだろう…」というようにか？

マルクスは彼の共産主義の概念を，その語を使用する前の1844年に遡って，『ミル・ノート』において次のように描写している。

「我々が人間として生産を行う場合を想定しよう。我々それぞれは，**二つの仕方で**自分自身と他人を**確証する**だろう。1）私の生産において，私は私の個性を対象化し，そのことによって，その活動中に，**私の生命の個人的表出**を享受するだけでなく，その対象物を見る際に，私の人格を**感覚的に，客観的に目に見える形で，だから疑いもなく一つの力として**認識できる個人的喜びを享受するだろう。2）私の生産物を君が使用あるいは享受する際に，私は，次のようなことを直接享受するだろう。私の労働によって一人の人間の欲求を充足したということ，つまり**人間の**本質を対象化したということを知ること，そして，それによって他人の人間的本質の欲求に照応した対象物を創造したということを知るること。3）私は，君にとって，君と類との仲介者であったこと，従って，私は君自身の人間的本質の完成であり，君自身の必要な一部であったということを君によって認識され，感じられること，かくして私自身が君の思考や愛において確証されることを知ること。4）私の生命の個人的表出において，私は直接に君の生命の表出を創造したこと，従って，私の個人的活動において私は，私の真の本質，私の人間的本質，私の**共同的本質**を直接に確証し，実現しただろうということ。」[87]

私は，この驚くべき豊富な章句をまとめ直すつもりはない。この注目すべき記述全体をそっとしておくことにするが，若干のコメントをする。

---

[87] 3：227-8.

1　人々は人間的個人として他の人のために生産する場合，彼等は意識的に彼等の個性を表出する。

2　この活動において，また彼等が生産する対象物の社会的性格において，彼等は彼等の人間的本質を表出する。

3　諸個人として彼等は，彼等の社会的本質を，従って他の人々の人間的欲求の充足を通じて自由に創造された社会的諸関係を，確立し，再確認する。

4　それぞれの直接的に共同的な生産の活動において，彼等はそれに関与するすべての人々，社会的諸個人，の本質を実現する。

このような章句は「マルクス主義者」を深く困惑させているのだが，彼等はそのような「情緒的なこと」を著者の「未熟性」に帰するのである。しかし，実際のところは，このような章句は，マルクスの仕事の本質を孕んでいるのである。私の見解では，「J.ミルに関するノート」は――勿論，未発展な形態においてではあるが――『経済学批判要綱』『資本論』の全内容を体現している。次の章句は，この14年後に書かれたものであるが，それは，「成熟した」マルクスが上掲の内容をどのように見ていたかを示している。

「ブルジョア経済学者達は，一定の社会的発展段階の諸観念に囚われているために，労働の社会的諸力を対象化することの必然性が，彼等には，生きた労働に対立する労働の社会的諸力の疎外の必然性と切り離しがたく見えるのである。しかし，生きた労働の直接的な性格が，すなわち単に個人的な，単に内的にのみ，単に外的にのみ普遍的な労働としてのその性格が止揚されるやいなや，諸個人の活動が直接的に普遍的，社会的な活動として措定されるやいなや，その疎外の形態は生産の具体的な諸要素からはぎ取られるのである。その時，それらは，［社会的］所有として，有機的な社会体として措定されるのであって，そこでは，諸個人が自らを個人として，しかし社会的個人として再生産するのである。」[88]

ブルジョア経済学者達は，彼等の最良の者でさえ，現存社会を「自然的」と思う信念

---

[88]『経済学批判要綱』，29：210.

のために，彼等はそのことを理解出来ないのである。彼等は近代の労働の資本主義的形態からその社会的性格を分離することが出来ない。この形態が止揚される時，疎外された労働 ── それは生産者に敵対する社会形態における生産を意味する ── は，直接的に普遍的なあるいは社会的な活動に取って代わり，そこでは「社会的個人」が自身を再生産し，彼等の間の関係を再生産するのである。我々は互いのために労働し，人類として互いの欲求を充足するであろう。そして，そのことが生活や思考の正常なあり方となるであろう。マルクスは，これを，これまでに存在しなかった何か新しい社会形態の導入として考えたのではなく，その「隷属の最後の形態」を脱ぎ捨てなければならない状態に留まっているところの現存の人間的事態の顕現化として考えたのである。

資本の権能の下で非人間的に発展させられてきた技術が人間的に援用されるようになる時，「処分可能時間」は反対の性格を採ることを止め，…必要労働時間は社会的個人の欲求によって量られることになるであろう。…なぜなら，真の富は，すべての個人の発展した生産力であるから。」[89]

生産諸力と社会的諸関係とのマルクスの区分は，「社会化された人間」の立脚点からのみつまり共産主義からのみ理解可能なのである。我々の個人的な生活活動が，意識的に，透き通るようにすべての人の欲求の充足に捧げられる世界にあっては，生産諸力は人間の創造的諸能力であろうし，またそうだということが分かるであろう。そして，またそれは我々の間で自由にのびのびと繰り広げられる諸関係と直接的に一致するであろうし，またそうだということが分かるであろう。諸欲求もまた人間的欲求になり，市場や搾取が必然的に引き起こすその歪みを伴わないであろう。

繰り返し言うが，私はここで「未来の青写真」について語っているのではない。共産主義についてのマルクスの概念は，我々が今日生活している疎外された生活の描写から切り離せるものではないということを言いたいのである。マルクスの求めたことを忘れてしまっていた「マルクス主義者」が，「移行」(transition)」の問題をひどくぶち壊してきた理由はこれなのだから。

人間性の生産諸力は非人間性の殻の中で成長してきており，それは搾取，退廃，抑圧の形態をとっているのである。同時に，この疎外の止揚の基礎は成熟してきているので

---

[89] 同上，29：94.

ある。労働の人間的諸条件の下において我々の諸欲求を充足するに十分な生産のための潜在力は，すでに存在している。実際上は，人間性の危機がこの可能性の兆候なのであり，この状態の拒否なのである。

『経済学批判要綱』におけるマルクスの近代産業についての展望はまさに有名である：

「現実の富は次のことに自らを表出している…充用された労働時間とその生産との間の巨大な不釣り合い，純粋な抽象に還元された労働とそれが監視する生産過程の発揮能力との間の質的不釣り合い。労働は，最早生産過程の中に含まれたものとしてあらわれるのでなく，むしろ人間が，監視者，制御者として生産過程に対して自己を関係させる。…最早，労働者は，変形された自然対象を客体と自分自身との間に挿入するのではない；今や，彼は，彼自身と非有機的自然との間に，彼が産業過程の中に転換した自然過程を，彼が意のままにしているその過程を挿入するのである。彼は生産過程のその側に立っているのであって，その主作用因ではなくなる。」[90]

我々の研究は，これが空想主義者の美辞麗句なのでなく，マルクスの全作業の精髄なのだということを明らかにしてきたはずである。近代産業，それは多量の悲惨と破壊をもたらしたのであるが，それは真の人間的生活の土台なのである。

「**現在の富の基礎となっている疎外された労働時間の盗み取り**は，この新しく発展した大規模な産業それ自体によって準備された基礎に対比すればみすぼらしい基礎に見える。交換価値に基礎をおく生産は崩壊し，直接的生産過程それ自体は貧困と敵対の形態を脱ぎ捨てる。諸個人の自由な発展，…一般的に社会の必要労働の最小限への短縮，この短縮は諸個人の芸術的，科学的等々の発展に照応するものであり，それは彼等すべてのために自由に設定された時間と生産された諸手段とによって可能となるのである。」[91]

マルクスはこのことについて『資本論』第3部の終りの方で再論している。

---

[90] 同上，29：90-1.

[91] 同上

「この部面での自由は，ただ次のことの中にのみ存在する。つまり，連合した生産者である社会化された人間が自然との物質代謝を合理的な方法で管理し，それを盲目的な力による支配ではなく，集団的な管理の下に置くこと；そして最小のエネルギー支出でもって，人間的本質に適った，相応しい諸条件のもとでそれを遂行すること。」[92]

1990年代にこの叙述を読むのは気恥ずかしいものがある。我々の時代の道徳的精神的荒廃の中に生活している人々にとって，それは何と純なものに聞こえることか。近代の悪夢の狭隘な水平線に制約されて，人は人類が現にそうあるという理由のために，世界はそうあるよりほかないということを受け入れることが出来るだけなのである。マルクスの考察は，このみすぼらしい狭隘さから抜け出る道を指し示しているのである。疎外，利己主義そして恐ろしい敵対は，人間性の否定である。近代技術の発展が与えられたことによって，ただその疎外の止揚のみが，人間的本質に相応しい適合的な諸関係を打ち立てうるのである。

マルクスにとっては共産主義は教義ではなかったが，普遍的な課題であったのであって，彼は，その社会的な性格が開放され，透明になり，すべての人々によって当然のこととして認識される世界を予測したのである。このような諸関係は，資本の支配の下での近代産業の成長によって可能となった。しかし，それは，人々や彼等の意識性および自覚性における変化を内包する。今世紀の経験が示すように，この課題は途方もなく大きな諸困難を引き起こすにちがいないのでって，私はマルクスがこれらの諸問題すべてに気づいていたなどと言おうとは決して思わない。

(b)　革命とは何か？

「マルクス主義」は，その全盛時に，資本主義の革命的打倒の準備に，その頂点がブルジョア国家機構の世界的粉砕である一過程にたづさわっていると考えた。しかし，マルクスは革命によって何を意味したのであったか？それは国家形態の変換の問題だったのか？一つの支配階級の追放と他の階級によるその置き換えの問題だったのか？所有の法的形態の変更問題だったのか？

---

[92]『資本論』第3部：959.

人間性に関するマルクスの見解に照らせば，我々はもっと深くものを見るべきであろう。まず何よりも我々は，彼の過去の革命に関する理解 ── 勿論，彼は何時もフランス革命を銘記していたのだが ── とプロレタリアートによる政治権力の獲得との間の区別を明確に認識しなければならない。次の『ドイツ・イデオロギー』における有名な一文は，マルクスがそれを如何に考えていたかを示している。

「あらゆる以前の革命においては，活動の様式は何時も不変のままであって，活動の異なった配分，他の人々にたいする労働の新しい配分が問題だったにすぎない。これに反して，共産主義革命は，これまでの存在している活動**様式**に対して向けられており，それは**労働**を消滅させ，あらゆる階級支配を階級それ自体共に廃棄するのである。なぜならば，それは最早階級の概念に入らない階級によって遂行されるからであり，その中においては現在の社会にあるすべての階級，民族性等々の解消が発現するものであるからである。」[93]（勿論，マルクスがこれを書いた時，その「労働」は「疎外された労働」を意味していた。）

「マルクス主義者」が理論化しようとした「社会主義への移行(transition)」の問題は，なお我々に立ちはだかっている。しかし，我々 ── その生活が，我々自身に対して敵として立ち向かってくる社会諸関係によって支配され，その思考が，貨幣や国家によって握られているところの社会的原子として生活している人々 ── が，如何にしてそれが出来るのか？我々のような人々が，どのようにして自由な人類の協働社会における生活のあり方について考え至ることが出来るのか？

そのような転化(transformation)は，17世紀イギリスの激変や18世紀終わりのフランスのそれの現代版では全くあり得ない。それらは，抑圧の特殊な形態から彼等の生活を解放し，自分達は何をしているのかを理解する試みの中に多くの人々 ── とはいえ実際は少数に留まったのだが ── を巻き込む重要な経験であった。しかし，彼等がその下で闘った諸条件の制約のため，それは労働の「異なった分配の問題」以上の結果をもたらさなかった。今私は，もっと遙かに劇的な変化を問題にしているのである。

以前に引用した『ドイツ・イデオロギー』の章句を続けよう。

---

[93]『ドイツ・イデオロギー』，5：52.

「この大規模な共産主義意識の生成のためには，そしてその運動の成功のためには，大規模な人間の変化が必要である。その変化は，実践的な運動つまり一つの革命の中でのみ生じうるのである。従って，その革命は，単に支配階級が他の方法では打ち倒されえないという理由からだけでなく，それを打ち倒す階級自体が，革命においてのみ，汚濁の全時代から自己を解放することに成功することが出来るのだ，という理由から必要なのである。」[94]

これは，人間的事態に対する障害を無傷のままに残す政治体制の変更なのではない。マルクスは，幾世紀にわたる疎外された生活の打破を問題にしているのである。そのような変化は，人々の変化，つまり意識的によく考えて彼等の生活のあり方と思考の仕方を変える人々への人々の変化，これなしには不可能なのである。

マルクスは，そのような転化が暴力的になりやすいという見解を変えたことはなかった。古い支配階級から政治的・社会的支配を奪い取ることは，それが権力や特権と癒着しているのだから，決して生易しいことではない。しかし，最も変わりうる，自己変革を遂げうる階級は革命的階級である。

だから，それがどのように起こりうるか，それがどういう困難に遭遇するか，どのようにして彼等に打ち勝つことが出来るか，を示す設計図を描くことなど，マルクスやエンゲルスにとって決して出来るものでなかったことは疑いもないことである。私は，人々が通過しなければならない社会的発展の一時期，前例のない規模で創造的かつ自己創造的な活動が展開される過程で，彼等がそれら諸問題に答を出すであろうひとつの時期について論じているのある。

疎外の止揚は古い生活の仕方の内部から生じなければならないが，しかしその発展の特定の局面においてである。つまり，それは，その疎外された非人間的性格が，その下で生活し，苦痛を味わっている人々の意識に衝突しはじめる革命的時期においてである。人間性とその非人間的形態との間の衝突の各様相が明るみに出て来なければならない。そうなれば，我々はその衝突が何を求めているものなのかを理解し始めることが出来るようになるだろう。

---

[94] 同上，5：52-3.

同時代人より多少その移行の一般的性質について把握できる人々は，全体としての社会における衝突の中で，実践的な活動に従事しなければならなかった。このため，彼等は，彼等の時代を社会主義革命の時期としてとらえる理解でもって，彼等のそれぞれの諸闘争を照らし出そうとする必要があったのであった。

それが如何に真面目なものであり，自己犠牲的であり，献身的であろうとも，「マルクス主義者」の間でなされた「革命を起こす革命政党」についての締まりのないお喋りは，問題の核心から外れたものであった。この過程の暴力という問題は，我々「マルクス主義者」とその反対者とがそれをめぐって大騒ぎしてきた問題であるが，それは殆ど重要な問題ではないのである —— 我々のきちがいじみた世界の中では，とにかく相当の暴力が行われているのである。

マルクスは，彼が予測した転化は「自らを一つ政党に組織するプロレタリアート」によって先導されるが，社会のあらゆる分野の人々によって支援されるものと確信していた。共産主義者が「権力を掌握し」，社会の上に立って「独裁（dictatorship）」を執行するという考えは，マルクスのものではなく，彼の生涯の反対者であったブランキのものだった。第2章で触れたように，マルクスは「プロレタリアートの独裁」という用語を次の意味で使用したのである。つまり，「権力執行者（dictator）」になるのは大衆からなる階級なのであって，自薦のエリートではない，ということである。

この階級の活動の最も重要な特徴は，その活動の中心がこの階級自身を消滅させること，つまり真の共同体状態へこの階級を解消することに置かれていることであった。

「労働者階級はその発展途上において，市民社会の替わりに，諸階級と彼等の敵対を除去するであろう協働社会を持ってくるのであるが，そこではいわゆる固有の意味での政治権力というものは最早存在しないであろう。なぜならば，政治権力というものは，正確には市民社会における敵対の公的表現なのであるからである。…最早階級というものが存在しない状態に物事がなっている場合にのみ，社会の進展は政治革命であることを止めるであろう。」[95]

---

[95]『哲学の貧困』6：212.

1848年の騒乱と1871年のパリコミューンの経験の研究から，マルクスは，この概念を明確にしたのであった。世界初の労働者階級の政府に対する野蛮な弾圧の後，第1インターナショナル総評議会によって各メンバーにに対して表明された「フランスにおける市民戦争」において，マルクスが光を当てたコミューンの諸特徴を見ると，転化についての彼の考えが如何に「マルクス主義者」のカリカチュアから隔たったものであるかが明白になる。コミューンは，「帝政に対する直接のアンチテーゼ」であったが，それはただ君主制政府形態に取って代わるためだけの共和国なのではなく，階級支配それ自体に取って代わるためのものだったのである。かれは常備軍を廃止し，それを「武装した人民」に置き換えることを強調した。警察は，その政治的属性を脱ぎ捨て，責任を持ったいつでも罷免されうるコミューンの代表に，その性格を変える。コミューンの最も重要な特徴は，その公僕が特別の特権を手に入れることを防止するためにそれが行った努力であった。マルクスは「選挙制の，責任ある，罷免可能な」司法制度[96]を打ち立てる意図を賞賛した。

「プロレタリアートの独裁」についての「マルクス主義者」の見解を受け入れている人々は，次の引用文にあるように，マルクスが非中央集権的政府に関するコミューン支持者の考えに好意を持っていたことを聞いて驚くかも知れない。

「あらゆる地方のコミューンは，彼等の共通の諸問題を中心街の集会において処理することになった。そして，これら地方集会はパリの国民代議会に代表を送ることになるのであるが，各代議員は罷免可能で強制委任を背負っているのである。」[97]

「フランスにおける市民戦争」において，マルクスは，コミューンを国家として注目したのでは決してなかったのであって，国家の諸機能に取って代わろうとした政府の一形態として注目したのであった。事実，その「演説」の初期の草稿において彼は，次のようにいっている。

「コミューン ── それは，国家権力が，社会を支配し抑圧する力としてでなく，社会

[96]「フランスにおける内乱」，22：331.
[97] 同上

自身の生きた力として，社会によって再吸収されたものであり，それは，彼等人民大衆の抑圧のために組織された強力の替わって彼等自身の強力を形成しつつある人民大衆による再吸収なのである —— それは，彼等の社会的解放の一つの政治形態であって，彼等の敵達によって彼等の抑圧のために行使されるところの社会の人為的な強力（彼等の抑圧者によって獲得された）（人民大衆に立ち向かって組織された彼等自身の強力）にとって替わるものなのである。」[98]

コミューンが達成したかも知れない事柄を考えて，彼は次のように語る。

「フランス全体が自ら労働し，自ら統治するコミューンに組織される…国民代議機関のための参政権は，全能の政府のための手品の問題でなく，組織されたコミューンメンバーの熟慮された表明となり，国家の機能は一般的な国民的目的のための少数の機能に縮減される。

コミューンとはそういうものである。…**社会的解放の政治形態**，つまり労働者自身によって創造されたかあるいは自然の贈り物であるところの労働手段が少数者によって横奪されている状態から労働を解放する社会的解放の政治形態なのであり，国家機関と議会制度が支配階級の現実的生活ではなく，彼等の統治の必要のために組織された一般的機関であるように，コミューンは，労働者階級の社会運動，だからまた人類の一般的な生成の社会運動ではなく，活動の組織的手段なのである。」[99]

これらの言葉は，「マルクス主義者」によって中央集権化された国家権力の独特の形態[100]を表現するのに近年広く使われてきた「労働者国家」なる用語を，マルクスが決して使わなかった理由を示している。バクーニンが，からかい調子で「約4000万のドイツ人がいるが，これは，4000万すべてが政府メンバーだということをいみするのか？」と尋ねた時，それは1874年のことだが，マルクスは率直に「そうだ。なぜなら，このシステムは諸共同体の自己統治として出発するのだからだ。…階級支配が消えてなくなる時

---

[98] 同上

[99] 同上，22：332.

[100] 註84を見よ.

には，今日的な政治的意味での国家は存在しないであろう」[101] と答えている。

プルードン，シュティルナー，バクーニンとの論争において問題だったのは，「国家の廃棄」に対する彼等の大きな呼びかけだったのではなく，何が国家の基礎なのかをよく考えることを彼等が拒否したことだった。労働の諸手段の私的所有したがって疎外された労働の形態が消えてなくなる時のみ，国家は共同体の中に消失するだろう。社会主義革命とは，ただこの歴史的過程が組織される道に他ならなかったのである。ロシア革命の歪んだ経験を見て，マルクスのこれらの思考こそ，我々の時代にとって彼が最も深い関係をもっているところのものだと私は思うのである。

(3)　結　　論

私は，マルクスの思考の中の最も重要なものの幾つかを検証し，それらを人間性の基礎的概念と非人間的形態の中でのその発展をめぐる思考として理解しようしてきた。世界と世界の諸問題をみるこの方法は，我々が次の世紀に前進して行く道を見つけることを可能にするであろうか？これが第5章で私が議論しようとする問題である。

我々は，歴史の「鉄の法則」の定式化というマルクスの誤った理解から抜け出さなければならない。逆に，彼の全仕事は，そのような法則は止揚され得るということ，つまり人間性はそれ自身の生活をコントロールすることが出来るということ，を示すことに向けられていたのである。

マルクスが完全な世界観を持ったということに満足することは全く滑稽なことだろう。彼自身の思考方法はそのような見方を受け入れ難いものにしている。ここで彼の思考方法というのは，今日彼が全く間違っていたと思われ得る多くの諸問題（私は，特に，時々考えるだけでゾッとする民族性についての彼の見解について想起しているのだが）に関して彼が主張した諸見解のことではなく，また未達成の彼の巨大な計画のことでもない。私がそう言う理由は，科学と科学がその内部で発展しなければならない疎外された社会形態との間の関係についての彼自身の認識が，完全な知的体系という考えとは全く相容れないものであるからである。第4章が，知というものが如何に発展するかについての

---

[101] 24：519.

マルクスの考えを扱う理由がここにある。